

ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む

——「言語ゲーム」に係わる部分——

黒 崎 宏

以下は『哲学的探究』の中で、特に「言語ゲーム」に係わる部分を、
独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解説した
ものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解き
たいのである。徹底的に解説したいのである。そのかわり、冗長である
と思われる所や強引であると思われる所も、あるであろう。おおかたの
御批判を乞いたい。

なお、[] は私の挿入である。また、[] をとばして読んでも、文
章は通じるようになっていく。原文のイタリックにはアンダーラインを
つけてある。

1. アウグスチヌスは『告白』の第I巻・第8章において言っている。
「彼ら（即ち、大人達）が何か或る物の名前を呼んで、その音声にしたが
ってそれに向かうとき、私はその様子を見て、彼らがその物を指示しよ
うと欲するときは、その物は彼らが発する音声によって言い表わされる
のだ、という事を理解した。しかし私は、彼らのその意図を、全ての人々
の生得言語である彼らの振舞から察知したのである。ここに、全ての人々
の生得言語とは、——彼らが何かを熱望する、保持する、拒否する、或
るいは避けるとき——顔つきや眼つき、手足の動き、声の調子、などによ
ってその心の状態を示す言語のことである。この様にして私は、様々
な [生得言語の] 文の特定の場所に於いて、語が繰り返し言われるのを
聞いて、その語が何を言い表わすのかを、次第に理解したのである。
そして私は、私の口がそれらの語に慣れ親しむにつれて、それらの語に
よって私の欲求を表現したのである。」

[アウグスチヌスの] この文章は、我々に、人間の言語の本質につい
ての或る一定の像を与えるように思われる。その像は [——それは実は
『論考』の言語像に他ならないのだが——]、言語の語は対象を名ざす名

前であり、そして文とはその様な名前の結合である、というものである。——我々は、言語についてのこの像の中に、如何なる語も意味 [(Bedeutung)] を持つ、という理念の根源を見出す。かく言うときの意味は、語に対応づけられている。それは、語が表わす対象である。

アウグスチヌスは、語の種類には色々あるという事については、何も言っていない。言語の習得をアウグスチヌスのように記述する人は、私が思うに、さし当たり「机」「椅子」「パン」のような名詞と人々の名前を考え、やっと第二段階として、ある種の働きや性質の名前を考え、そしてその他の種類の語については、そのうち分かるであろうものとして、考えるのである。

さて、以下のような言語使用について考えよ：私が或る人を買物に遣る。[その際] 私は彼に「5つの赤い林檎」と書いてある紙片を渡す。彼は[店に行って] その紙片を店の人に渡す。店の人は「林檎」と書いてある箱を開け、次に或る表の中に「赤い」という語を捜し出し、それに相對している色見本を見出す。次に店の人は——私は、彼は数字を暗記している、と仮定する——数字を順に「5」まで唱え、夫々の数字を唱える度毎に、その箱からその色見本の色を持っている林檎を一つ取り出す。——この様に、そしてこれと似た様に、人は語を使用するのである。——「しかし、「赤い」という語を何処にそして如何に捜すべきか、そして「5つ」という語で何を始めるべきかを、店の人は如何にして知っているのか？」——さよう、私は、店の人は私が記述した様に行動する、という事を仮定しているのである。説明は何処かで終わりになるのである。——しからは、「5」という語の意味 [(Bedeutung)] は何か？——その様な事は、此処では、全く問題にならない。ただ、「5」という語は如何に使用されるのか、という事のみが、問題になるのである。[このパラグラフにおいて、既に『論考』の言語像は根本的に批判されている。『探究』における以下の展開は、或る意味で、全てこのパラグラフにおいてインプリシットに言われている事についての展開に過ぎないのである、とさえ言えよう。]

2. <意味>というかの哲学的概念は、言語が機能するその仕方についての或る素朴な想像に、その根を有している。しかし人はまた、[その様に言うとき、] それは、我々の言語よりもより素朴な言語を想像し

ているのだ、と言う事も出来るのである。

アウグスチヌスが与えたような記述が適合する〔或る素朴な〕言語を考えよう。それは、石を積む人Aとその助手Bの間の意志の疎通に使われるべき言語である。Aは石材を積んで家を建てている。石材には、台石、柱石、板石、梁石、がある。BはAに、Aが必要とする順序で、石材を渡さなくてはならない。この目的のために彼らは、「台石」「柱石」「板石」「梁石」という〔4つの〕語で成り立つ言語を用いている。Aはこれらの語〔のどれか〕を叫ぶ；——Bは、それらの叫びに応じて持って行く事を習った石を、〔Aの所に〕運ぶのである。——この言語を、完全な原始的言語と考えよ。

3. アウグスチヌスは意志疎通の或るシステムを記述しているのだ、と言えよう。ただ、我々が言語と呼ぶものの全てがこのシステムである、という訳ではないのである。そして、「この記述は適切か不適切か？」という問いが生ずる非常に多くの場合に於て、人は「全てが……という訳ではない。」という言い方をしなくてはならないのである。即ち、この「この記述は適切か不適切か？」という問いに対する答えは、「その通り、適切である。しかしそれは、この狭く限定された領域に対してのみ、であり、君が記述しようとしていた全領域に対して、ではない。」というものである。

この事は、あたかも或る人が「ゲームとは、人が物を或る規則に従って平面上で動かし、……というものである。」と説明する様なものである。——そして彼に対する我々の答えは、こうである：君は盤ゲームについて考えているようであるが、しかし、全てのゲームが盤ゲームであるという訳ではない；君は、君の説明を明確に盤ゲームに限定すれば、君の説明を正しくする事が出来る。

4. 或る文書を考えよう。そこにおいては、文字は、音を表わすために用いられ、しかしまた、アクセントを表わすためにも、句読点としても、用いられるのである。(人は文書を、聴覚像を記述するための言語と、考える事が出来るのである。) ここで君は、或る人がこの文書を、夫々の文字には或る音が単純に対応し、文字にはそれ以外の機能が全く無い、という様に理解していると考えよ。アウグスチヌスの言語把握は、文書に

ついでにその様な極度に単純化した把握に似ているのである。

5. 人は、第1節の〔「5つの赤い林檎」と書いてある紙片を渡して或る人を買物に遣る〕例を考察すれば、恐らく、語の意味という一般的概念が言語の働きに霧をかけ、それを如何に見え難くしているか、という事に気づくであろう。——〔しかし〕もし我々が、語の目的と働きを明確に展望する事が出来るところの、言語の諸現象を、〔先の第1節の例の様に、〕言語の原初的な使用という場面で調べれば、その霧は晴れるのである。

子供は、言葉を習うとき、その様な原初的な形の言語を用いる。言語を教えるという事は、ここでは、説明ではなく、訓練なのである。

6. 我々は、第2節の言語〔「台石」「柱石」「板石」「梁石」という〔4つの〕語で成り立つ言語〕がAとBの全言語である、という事を想像することが出来よう；否それどころか、それが或る部族の全言語である、という事さえ、想像することが出来よう。〔その部族の〕子供は、AとBの様に行動するように、そしてその際、それらの〔4つの〕語を用いるように、しかも、他人のそれらの語に対してAやBの様に反応するように、育てられるのである。

訓練の重要な部分には、教える人が対象を指示し、子供の注意をその対象に向け、そしてその際、或る語を言う——例えば、板石を指示して「板石」と言う——という事がある。（この作業を私は、「直示的説明 (hinweisende Erklärung)」とか「直示的定義 (hinweisende Definition)」とかとは言いたくない。何故なら、子供はまだ物の名前について問う事が出来ないのであるから。この作業を私は、「語の直示的教示 (hinweisendes Lehren)」と名付けたい。——〔ここで〕私は言っておく：この作業は、訓練の重要な部分を構成するであろう；何故ならこの作業は、それ以外に考えられないから、ではなく、人間にとって〔事実〕訓練の重要な部分なのであるから。)人は、この様な語の直示的教示は語と物の間の連想的結合を打ち立てる、と言うことが出来よう。しからば、〔かく言うとき〕それは何を意味しているのか？ さよう、それは様々なことを意味し得る。しかし、さし当たり人が考える事は、子供が〔或る〕語を聞くと、その子供にはその〔語を直示的に教示されたときに指示された〕物の像が念頭に浮かぶ、という事である。

しかし、今その事が起こるとしても、——それがその語の目的であるのか？——その通り、それが [その語の] 目的であり得る。——私は、語（音の系列）のその様な使用を考える事が出来る。（或る語を言うことが、いわば、想像を奏でるピアノの鍵盤を叩く事なのである。）しかし第2節の言語に於いては、想像を喚起することが語の目的ではない。（想像を喚起することが本来の目的にとって有益である、という事が見出されることも、勿論あり得る。）

しかし、直示的教示が想像を喚起せしめるとき、——私は、直示的教示は語の理解をもたらす、と言うべきなのか？ [そうではない。]「板石！」という叫びに応じて板石を持って行く人が、その叫びを理解しているのではないのか？ [そうである。]——しかし、確かに直示的教示は、「板石！」という叫びに応じて板石を持って行かせる事を助けるが、しかしそれは、唯或る一定の教育と一緒に成る事に過ぎない。それとは別の教育と一緒に成れば、語の同じ直示的教示が全く別の理解をもたらすかも知れないのである。

「私は、支持棒をレバーと結合する事によって、ブレーキを直す。」——その通りである；但しそれは、それ以外の全機構が与えられている限りに於いて、である。それ以外の全機構と一緒に成るのみ、そのレバーはブレーキ・レバーなのである。ブレーキ・レバーは、それを支えている全機構から分離されるならば、レバーですらない。それは、何でもあり得るが、しかし、何でもないかもしれないのである。

7. 第2節の言語を実際に使用する際、一方が語を叫び、他方がそれに従って行動する。しかし、その言語の教育に於いては、教わる人が対象の名前を言う——即ち、教える人が或る石を指示したとき、その石の名前を言う——という過程もあるであろう。——それどころか、ここにはもっと単純な練習もあるであろう。それは、教師が手本として言ってみせた語を生徒が口真似して言う、というものである。——何れも、言語 [使用] に似た過程である。

また我々は、第2節の語の使用の全過程が、子供がその母国語を覚え込むための諸ゲームの一つである、と考える事も出来る。私はそれらのゲームを「言語ゲーム (Sprachspiel)」と名付けようと思う。そしてまた私は、原初的な言語 [使用] についても、しばしば言語ゲームとして語

るであろう。

そしてまた人は、石の名前を言う過程と、手本として言われた語を口真似して言う過程をも、言語ゲームと呼ぶことが出来よう。円陣ゲームに於いて行なわれる語の多くの使用について、考えよ。

私はまた、言語とそれが織り込まれる行為の全体をも、「言語ゲーム」と呼ぶであろう。

8. 第2節の言語の拡張について、考察しよう。その拡張された言語は、「台石」「柱石」等々といった四つの語の他に、第1節で店の人が数字を用いた様に用いられるところの、語の列を含んでいる（それは、アルファベットの文字列でもよい）。更に、二つの語——それらは「そこへ」と「これ」であってもよい（何故なら、これらは既に臍気ながらその目的を暗示しているから）——を含んでいる。なおそれらは、指示をする手の動きと結合されて、用いられるのである。そして最後に、幾つかの色見本を含んでいる。[さて] Aは「 d_5 -板石-そこへ」といった種類の命令を与える。その際彼は助手Bに色見本を見せ、そして「そこへ」という語と共に建設現場の或る場所を指し示す。Bは板石の置き場から、その色見本と同じ色の板石をアルファベットの字一つに対し一つずつ順に「d」まで取り出し、それらをAが指し示した場所に運ぶ。——他の場合には、Aは「これ-そこへ」という命令を与える。[この際]「これ」と言って彼は或る石材を指示する。等々。

9. 子供がこの[拡張された]言語を習うとき、彼は「数字」 a, b, c, \dots の列を暗記しなくてはならない。そして彼は、それらの使用を学ばねばならない。——この教育に於いてもまた、「数字」 a, b, c, \dots の直示的教示が行なわれるのであろうか？——さよう、例えば板石が指し示され、「 a, b, c 板石」の様に数えられるであろう。——[これに対し、] 数を数えるのに用いられるのではなく、一目で把握出来るくらいの物の集まり[の個数]を表わすのに用いられる数字の直示的教示は、「台石」「柱石」等々の直示的教示にずっと似ている。子供達は、最初の五つ乃至六つの基数の使用をその様にして[、直示的教示によって]学ぶのである。

「そこへ」と「これ」もまた、直示的に教られるのであろうか？——

人は如何にしてこれらの〔語の〕使用を、例えば教えることが出来るのか、想像してみよ！ その際、場所と物が指示されるであろう。——しかしこの指示は、それらの語の〔現実に於ける〕使用に於いても行なわれるのであって、唯単に使用の学習に於いてのみではないのである。

10. さて、この〔拡張された〕言語の〔様々な〕語は何を表わす (*bezeichnen*) のか？——それらの語〔例えば、「a」「b」「c」……〕が表わすもの、それは——〔事実そうである様に〕それらの語の使用のされ方において、でないとするれば——如何に示されるべきなのか？ そして我々は、確かにそれらの語の使用を記述してきた。それ故、「この語はこれを表わす。」という表現は、その〔語の使用の〕記述の一部分に成らなくてはならないであろう。或るいは：その〔語の使用の〕記述は「この語……は……を表わす。」という形にもたらされるべきなのである。

さて確かに人は、「板石」という語の使用の記述を、「この語はこの対象を表わす。」という様に短縮できる。例えば、「板石」という語は我々が実際には「台石」と呼んでいる形の石材を指示するのだ、という誤解を解く事だけが問題であるときには、人は、「この語はこの対象を表わす。」と言って、板石を指し示すのである。——しかし、この「対象を表わす」という指示の仕方は、即ち、「板石」とか「台石」とかいう語のこの使用は、いま問題の誤解を別にすれば、既によく知られているのである。

そして同様に人は、もし、記号「a」「b」等々は数を表わす、と言う事によって、例えば、この〔拡張された〕言語に於いては、「a」「b」「c」は実際には「台石」「板石」「柱石」が演じている役割を演じているのだ、という誤解を取り除く事が出来るならば、そう言う事が出来る。そしてまた人は、もし、「c」はこの数を表わすのであり、あの数を表わすのではない、と言う事によって、例えば、アルファベットは a, b, c, d, 等々の順序で用いられるべきであり、a, b, d, c, の順序ではない、という事が明らかにされるならば、そう言う事が出来る。

しかし、人が〔種々の〕語の使用の記述を「この語……は……を表わす。」という形で相互に似たものにするとしても、それによって、それらの語の使用が似たものになるわけではない！ 何故なら、我々が〔後

に] 見る様に、それらの語の使用は全く似ていないのであるから。

11. 道具箱の中の [種々の] 道具について考えよ：そこには、ハンマー、ペンチ、鋸、ねじ回し、物差し、にかわ用深鍋、にかわ、釘、ねじ釘、[等々] がある。—— [そして] これらの物の機能が様々である様に、語の機能も様々なのである。(そして [また]、ここかしこに類似性がある [という事も勿論である]。)

言うまでもなく我々を混乱させるのは、[様々な] 語が、言われるのを聞くと、或るいは、書かれたり印刷されたりして眼にふれるとき、それらの語が似た形で現われる、という事である。何故なら、それらの語の使用がそれ程はっきりと我々に現われる訳ではないから。特に、我々が哲学しているときに、そうである！

12. 我々が機関車の運転台を覗くと、どうであろう：そこには、多かれ少なかれ皆同じ様に見える [様々な] 握りがある。(これは当然である。何故なら、それらは皆手で握られねばならないのであるから。) しかし或るものは、柄の曲がった握りであり、連続的に調整されることが出来る。(それは弁の開き具合を調整するのである。) 他のもは、スイッチの握りであり、倒すか立てるかの二通りの仕方でのみ作動する。第三のものは、ブレーキ・レバーの握りであり、強く引けば引くほど強くブレーキがかかる。第四のものは、ポンプの握りであり、ただ前後に動かされている間だけ働く。

13. 我々が「言語の語は全て何かを表わしている。」と言うとき、しかし、かく言う事で我々は如何なる区別をしようと望んでいるのか、という事が正確に説明されていない限り、さし当たり未だ全く何も言われた事にはならないのである。(それは、例えば、我々は第8節の言語の語を——ルイス・キャロルの詩に出て来るような、或るいは、或る歌にある「ジュヴィヴァレラ」のような——「無意味な」語から区別しようと欲している、という事であるかも知れない。)

14. ある人が「あらゆる道具は、何かに手を加えるために、使われるのだ。ハンマーは釘の位置に、鋸は板の形に、等々、」と言った、と想

像せよ。それでは、物差し、にかわ用深鍋、そして釘は、[一体] 何に手を加えるのか? —— [それは] 「物の長さについての我々の知識、にかわの温度、そして箱の頑丈さ」[についてである。] —— 「あらゆる道具は、何かに手を加えるために、使われるのだ。」と言って、道具についての] 表現を同じにする事によって、[一体] 何が得られると言うのか? —— [何も得られはしない。]

15. 「表わす (bezeichnen)」という語は、記号 (Zeichen) が表わす対象にその記号が付いているときに、恐らく最も直接的に用いられる。Aが石を積むときに用いる [種々の] 道具には [夫々] 或る記号が付いている、としよう。[そして] Aが助手にその記号の一つを示すと、助手はその記号が付いている道具を [Aの所に] 持って行くのである。

その様に、そして、多かれ少なかれそれと似た仕方で、名前は対象を表わし、名前は対象に与えられるのである。——哲学する際には我々は、何かに名前を付けるという事は物に名札を [直に] 付けるのに似ている、と自分に言い聞かせる事が、しばしば有効である事が分かるであろう。[心的媒介は必要が無い、というのであろう。]

16. [第8節の言語ゲームに於いて] AがBに示す色見本については、どうか? ——それは言語に属しているのでしょうか? さよう、好きなように考えればよからう。[確かに] それは、言語には属していない; しかし、私が或る人に「これ」という語を言ってみよ。」と言うとき、君はこの「これ」という語をも、この文の構成要素の中に数えるであろう。そして、それでもそれは、第8節の言語ゲームに於ける色見本と、全く似た役割を演じているのである; 即ちそれは、他人が言うべきものの見本なのである。

我々が見本を言語の道具 [の一つ] に数えるとき、それは全く自然であり、混乱を引き起こす事は殆どない。

《再帰的代名詞「この命題」についての考察 [をせよ。]》 [命題「この命題は偽である。」に於いて、「この命題」が再帰的であるならば、それは命題「この命題は偽である。」を意味する。そしてその場合には、命題「この命題は偽である。」は「嘘つきのパラドックス」に陥る。従って、命題「この命題は偽である。」に於ける「この命題」は、もしそれが再帰

的であるならば、言語の道具に数えてはいけないのである。なお、Garth Hallett, *A Companion to Wittgenstein's "Philosophical Investigations"*, Cornell University Press, 1977, p. 87. を参照。]

17. 我々は、第8節の言語には様々な語の種類がある、と言うことが出来よう。何故なら、「板石」という語と「台石」という語の機能は、「板石」という語と「d」という語の機能より、相互により似ているから。しかし、我々が様々な語を如何に分類するかは、その分類の目的と——我々の傾向性に依存するであろう。

人が道具を——或るいは、チェスの駒を——分類することが出来る様々な視点について、考えよ。

18. 第2節と第8節の言語は命令のみによって成り立っている、という事は、[それ自体としては] 問題にならない。もし君が、だから第2節と第8節の言語は完全ではない、と言うとすれば、君は自問せよ：我々の言語は完全なのか？我々の言語は、化学の記号法や微積分の記号法に入り込まれる以前でも、完全であったのか、と；何故なら、これらの記号法は、我々の[もともとの]言語[を旧市街とすれば、そ]の、言わば郊外[の新市街]であるのだから。(そして、どのくらい多くの家や通りがあれば、街は街であり始めるのか?) 人は、我々の[もともとの]言語を旧市街として見る事が出来る：小道の迷路と広場、古い家と新しい家、そして様々な時代に建増しされた家、これら[(旧市街)]が、真っ直ぐで規則的な通りに一様な家が建ち並ぶ多くの新市街によって、囲まれているのである。

19. 戦いにおいて命令と報告のみから成り立っている言語を、人は容易に想像することが出来る。——或るいは、問いと、[それに対する]肯定と否定の表現のみから成り立っている言語を。そしてその他の無数の言語を。——ある言語を想像することは、ある生活の形式を想像することである。

しかし、第2節の言語の場合はどうであろうか：第2節の例における「板石！」という叫びは、文であろうか、語であろうか？——もし語であるならば、それは、我々の日常言語における「イタイシ」と発音され

る語と同じ意味を有してはいない。何故ならそれは、第2節においては、まさに叫びであるのだから。しかし、もし文であるならば、それは、我々の〔日常〕言語における「板石！」という省略文〔——それは「板石を持ってきて！」という文の省略である。——〕と同じではない。〔何故なら、第2節の言語には、「板石を持ってきて！」という文は無いのであるから。〕——「第2節における「板石！」という叫びは、文であろうか、語であろうか。」という問いに関する限り、君は「板石！」を、語であるとも、文であるとも、言うことが出来る；それは、おそらく適切には、「退化した双曲線」という言い方にならって）「退化した文」と言うのがよいであろう。しかもそれは、まさに我々の「省略」文なのである。——しかし「省略」文とは、やはり、「板石を持ってきて！」という文の短縮形であるに過ぎない。しかもこの「板石を持ってきて！」という文は、第2節には存在しないのである。——しかし、何故私は逆にこの「板石を持ってきて！」という文を「板石！」という文の引き延ばししと言ってはならないのか？——何故なら、「板石！」と叫ぶ人は、本来は「板石を持ってきて！」という事を意味しているのであるから。——しかし、如何にして君は、「板石！」と言うとき、「板石を持ってきて！」という事を意味しているのか？ 君は「板石を持ってきて！」という文を内心自分に言い聞かせているのか？ そして何故私は、「板石！」という叫びで意味することを言うのに、「板石！」という表現を別の表現に言い換えなくてはならないのか？ そして、もし「板石！」と「板石を持ってきて！」が同じ事を意味しているならば、——何故私は、「彼が「板石！」と言うとき、彼は「板石！」を意味している。」と言ってはならないのか？ 或るいは、何故君は、「〔板石！〕と言って」板石を持ってきて！」を意味することが出来るとき、「板石！」を意味することが出来ないのか？——しかし、私が「板石！」と叫ぶとき、私が思っていることは、彼は私に板石を持ってこなくてはならない！ ということである。——確かに、そうである。しかし「その思い」は、君が言った〔板石！〕という文とは違った文を、何らかの形で、考えている、という事において成り立っているのであるだろうか？〔そうではない。〕——〔なお、「退化した双曲線 (degenerierte Hyperbel)」とは、次のような事ではないかと思われる：双曲線

$$x^2/a^2 - y^2/b^2 = 1$$

には、2本の相交わる漸近線

$$x/a+y/b=0, \quad x/a-y/b=0$$

がある。そして、 $a \rightarrow 0$ 、 $b \rightarrow 0$ のとき、その双曲線はそれが有する2本の相交わる漸近線に限りなく近づく。その意味で、「2本の相交わる漸近線」は「退化した双曲線」である、と言える。即ち、「退化した双曲線」とは「2本の相交わる漸近線」のことではないのか。]

20. しかし、ある人が「板石を持ってきて！ (Bring mir eine Platte!)」と言うとき、そのように言う事は、今や、彼はこの表現を一語の「板石！」に対応した一つの長い語であると思ひ得るかの如くに、見える。——したがって人は、この表現を、或るときは一つの語として、また或るときは四つの語として、考えることが出来るのか？ そして人は、通常それをどう考えるのか？——私が思うに、我々は以下のように言いたくなるであろう：もし「板石を持ってきて！ (Bring mir eine Platte!)」という文を他の様々な文——例えば、「私に板石を手渡して」、「彼に板石を渡して！」、「板石を2枚持ってきて！」、等々——と対比して使用するときには；それ故、もしその文を、それを構成している語が含まれている他の文と対比して使用するときには；我々はその文を、四つの語によって作られた文として考える。——しからば、或る文を他の文と対比して使用する、という事はどういうことか？ それは、その際例えはその「他の文」が念頭に浮かぶということか？ しかも、全ての「他の文」が。そして、人が「或る文」を言っている間中、或るいはその前、或るいは後に。——違う！ たとえその様な説明が我々にとって幾らか魅力的であるとしても、実際に起こっている事について、ちょっと考察しさえすれば、その様な説明が間違えであることは見て取れる。我々が、「板石を持ってきて！」という命令を他の様々な文と対比して使用する、と言うのは、我々の言語がその様な他の文の可能性を含んでいるから、である。我々の言語を理解していない外国人が、人が「板石を持ってきて！」という命令を与えているのをしばしば見聞すれば、その外国人は、この「イタイシヨモツキテ」という音の列の全体が一つの語であり、そしてそれは、その外国人の国の言葉では例えば「建築石」に当たる、と思うかもしれない。後に、もしその外国人自身がその命令を与えたとすれば、彼はおそらくその命令を、我々とは違って発音するであろう。そし

て我々は言うであろう：彼がその命令をその様に奇妙に発音するのは、彼はその命令を一語であると思っているからである、と。——しかしそうすると、彼がその命令を発しているとき、彼がその文を一語であると思っている事に対応して、何かもっと別の事も彼の内に起こっていないであろうか？——彼の内には、[我々と] 同じ事が起こり得る。或るいはまた、[我々とは] 別の事も。それでは、君が「板石を持ってきて！(Bring mir eine Platte!)」といった命令を与えるとき、君の中に何が起こるか？；君がこの命令を言っているとき、それは四語から成り立っている、という事を君は意識するか？ 勿論君は、——[その命令のみならず、それが対比される] その他の文をも含む——この言語 [(ドイツ語)] をマスターしている。しかし、君がその命令を言っているとき、この「言語をマスターしているという事」が何らかの仕方です[出来事として]「起きている」のであろうか？——そして確かに私は次のような事を認めた：その命令を [我々とは] 別に把握した外国人は、その命令をおそらく [我々とは] 別に発音するであろう；しかし我々が、[外国人が我々とは別の] 間違った把握をした、と呼ぶ事は、その命令に随伴する何らかのものの中に、無くてはならないのではない。

文が「省略」文であるというのは、それを言うときに我々が意味している事の何かを、それが [字面の上で] 抜かしているから、ではない。文が「省略」文であるというのは、それが——我々の文法における或る一定の手本と比べて——短縮されているから、なのである。勿論ここで、人は次のように反論することが出来よう：「君は、短縮された文と短縮されない文は同じ意味 (Sinn) を有している、ということ認める。——しからば、それら二つの文はどんな意味を有しているのか？ 一体この [共有されている] 意味に対して、それを表現する言語表現はないのであろうか？」——しかし、二つの文が同じ意味を有するという事は、それらが同じ使用 (Verwendung) を有する、ということではないのか？——(ロシヤ語においては、「この石は赤い。(Der Stein ist rot.)」と言う代わりに、「石赤い。(Stein rot.)」と言う；[それでは、] 繫辞はロシヤ人達には無意味なのであろうか？ 或るいは、彼らは繫辞を付けて加えて考えているのであろうか?)

21. Bが、Aの要請に応じて、石材置き場にある板石や台石の数を報

告する、或るいは、或る一定の場所にある石材の色と形を報告する、という言語ゲームを考えよ。——その様な報告は、したがって、「板石5つ。」となるかもしれない。しからは、報告或るいは言明の「板石5つ。」と命令の「板石5つ！」の違いは何か？——さよう、[それは] それらの言葉を発する事が言語ゲームに於いて演じる役割 [であろう]。勿論、それらが発せられるときの口調、顔つき、その他多くの事も、違っている。しかしまた我々は、[それらが発せられるとき、] 口調 [と顔つき] は同じであり——何故なら、報告も命令も種々様々な口調と顔つきで行なわれることが出来るから——報告或るいは言明の「板石5つ。」と命令の「板石5つ！」の違いは、ただ単に [それらの] 使用にのみあるのだ、という事も考えられるのである。(勿論我々は、「言明」とか「命令」とかいう語を、文の文法的な形と抑揚を表わすために、用いることも出来よう。例えば、確かに我々は「今日の天気は素晴らしくはないですか？」という文を、[「今日の天気は素晴らしい。」という] 言明として用いるときも、疑問文であると言うのである。) 我々は、全ての言明が修辞疑問の形と抑揚を持っている、或るいは、全ての命令が「君はそれをして頂けますか？」という疑問文の形をしている、その様な言語を考えることが出来よう。したがって [この場合]、人は恐らく言うであろう：「彼が言うことは、疑問文の形をしてはいるが、しかし実際は命令なのである。」——即ち、言語の実際的使用に於いては、彼が言うことは命令の機能を持っている、という訳である。(同様に人は「君はそれをするであろう。」という文を、予言としてではなく、命令として、言うのである。何がそれを予言となし、何がそれを命令とするのか?)

22. 主張の中には、主張される当の事についての想定が入っている、というフレーゲの見解は、実は我々の言語に於いては、如何なる主張命題も「シカジカである、という事が主張される。」という形に書くことが可能である、という事に基づいている。——しかし「シカジカである、という事」は、我々の言語に於いては、残念ながら命題ではない、——言語ゲームに於ける動きですらない。[したがってそれは、想定ではない。] としてもし私が、「シカジカである、という事が主張される。」と書く代わりに、「主張される：シカジカである。」と書くとなれば、この場合には、「主張される」という言葉は当に余計なのである。[したが

って、フレーゲの見解は成り立たない。]

確かに我々是如何なる主張をも、疑問文とそれに続く肯定の形に書くことが出来るであろう：例えば「[雨である。]という主張を」,[雨ですか? そうです!]のように,[しかし]この事は、如何なる主張にも疑問が入っている、という事を示しているであろうか? [示してはいない。]

人には確かに主張記号 [↑] を、例えば疑問符 [?] と対比して用いる権利がある；或るいは、主張を空想とか想定から区別しようとして用いる権利がある。ただもし人が、主張は、[或る事を] 心に抱く事と(、真理値を付与する、等々 [によって]) [その事を] 主張するという事、という二つの行為から成り立っているのだ、と思い、そして、我々はこれらの行為を、楽譜にしたがって歌うかのように、命題記号にしたがって行なうのだ、と思うならば、それは間違いである。書かれた文を高い声で或るいは低い声で読むという事は、勿論、楽譜にしたがって歌うという事と、比較可能である。しかし、読まれた命題を「思う」(或るいは)考える)という事は、楽譜にしたがって歌うという事と、比較可能ではない。

フレーゲの主張記号 [↑] は、文の始まりを明らかにする。それは、したがって、ピリオドと似た機能を持っている。それは、文全体を、文の中の文 [節] から区別する。もし私が、或る人が「雨が降る」と言うのを聞き、しかし、文全体の初めと終わりを聞いたかどうかが分からないとき、この文は、それだけでは私に何の情報も与えてくれない。[したがって、文の初めと終わりの確認は、非常に大切なのである。]

「ワイトゲンシュタインの脚注：」或る一定の闘う構えをしたボクサーを表現している絵を、想像せよ。さてこの絵は、ボクサーは如何に立ち、如何なる姿勢をとるべきなのか；或るいは、ボクサーは如何なる姿勢をとってはならないのか；或るいは、或る特定の人がシカジカの場所で如何に立っていたのか；或るいは、等々、といった事を、人に伝えるために用いられることが出来る。人はこの絵を(化学的な言い方にならって)「文基 (Satzradikal)」と呼ぶことが出来よう。きっとフレーゲは、[彼が言う]「想定 (Annahme)」を【ここで言う】文基の様に考えていたのである。[化学に於いては、例えば、 $-OH$ を「水酸基」、 $-C_2H_5$ を「エチル基」と言い、両者が結合すると、エチルアルコール C_2H_5OH になる。

分子は基に分解されるわけである。同様にフレーゲに於いては、主張は、主張される当の事についての想定（文基）と、それについての主張に、分解されるのである。]

23. それでは、文にはどの位の種類があるのか？ 例えば、主張、疑問、命令？——その様な種類は無数にある：我々が「記号」「語」「文」と呼ぶものの全てには、無数に異なった種類の使用があるのである。そしてこの多様性は、固定したもの、断固として与えられたもの、ではない；言語の新しい形、新しい言語ゲームが、言うなれば生まれ、他の言語ゲームが廃れ、忘れられるのである。（この事についてのおおよその像は、数学の歴史が与えてくれる。）

「言語ゲーム」という語は、ここに於いては、言葉を話すという事は、活動の一部分である、或るいは、生活の形式の一部分である、という事を際立たせるためのもの、なのである。

君は、言語ゲームの多様性を、以下の例やその他の例に於いて、思い浮かべてほしい：

- 命令を与える、命令にしたがって行動する——
- 或る対象を、観察し、或るいは、測定して、記述する——
- 或る物を記述（設計図）にしたがって作る——
- 出来事を報告する——
- 事の成りゆきを推測する——
- 仮説を立て、検証する——
- 実験の結果を表やグラフで表現する——
- 物語を作り、それを読む——
- 劇を演ずる——
- 輪唱する——
- 謎を解く——
- 小話を作り、それを語る——
- 計算の応用問題を解く——
- 或る言語から別の言語へ翻訳する——
- 願う、感謝する、ののしる、挨拶する、祈る。

——言語の道具とその使用法の多様性、語の種類と文の種類が多様性を、論理学者が言語の構造について言ってきた事と比較することは、興

味ある事である。(そして、『論理的哲学的論考』の著者 [が言語の構造について言ってきた事と比較すること] もまた [, 興味ある事である]。)

24. 言語ゲームの多様性を心に留めない人は、例えば、以下のように問う傾向があるであろう：「問いとは何か？」——問いとは、私はコレコレの事を知らない、という事の確認であろうか？ 或るいは、問いとは、私は他人が私に……と言ってくれるであろうと望んでいる、という事の確認であろうか？ 或るいは、問いとは、私の自信のない心の状態の記述であろうか？——そして、「助けて！」という叫びも [また]、その様な記述であろうか？ [言語ゲームの多様性を心に留めない人は、様々な言語使用を、「確言」とか「記述」とかいった単一の形に纏めようとするのである。]

如何に多種多様なものが [記述] と呼ばれているか、という事について考えよ。[例えば:] 身体の姿勢の座標による記述；顔の表情の記述；触覚の記述；気分の記述。

確かに人は、通常の形の問いの代わりに、確言や記述という形を用いる事が出来る [。例えば、こうである]：「私は、……かどうか知りたい。」或るいは「私は、……かどうか疑っている。」——しかし、そうする事によって、異なった言語ゲームが相互により近づけられたわけではない。

そのような [文] 変形の可能性、例えば、全ての主張文の「私が思うに、」とか「私は信ずるのだが、」とかいう但し書で始まる文への変形の可能性、が意味することは、別の所 [(第402~403節)] でより一層明確に示されるであろう。([これは] 独我論 [に係わる問題である。])

25. 時に人はこう言う：動物は、精神的能力が欠けているが故に、話さないのだ。そしてこの事は、「動物は、考えないが故に、話さないのだ。」という事を意味している。しかし、動物は [, ……が故に、ではなく、] 当に話さないのである。或るいはむしろ、こう言うべきである：動物は——もし我々が最も素朴な [動物の] 言語形態を無視するとすれば——言語を使わないのである。命令する、問う、数える、喋る、[等々] は、行く、食べる、飲む、遊ぶ、[等々] がそうであるように、我々の自然史に属しているのである。